吉祥果

円頓寺だより

令和５年
９月号
【吉祥果 395 号】

若上人が檀家さん宅の月参りから帰ってきて、うれしそうにスマホの写真を見せてくれました。

「なんだ、この写真？」

というと、その写真の話をしてくれました。

その日、伺ったあるお檀家さんでのこと。

参りを終えて、お茶を飲みながら、お話をしていたら、ご主人さんが、

「ねぇ若。ちょっとこれ見て！」

って一枚の紙をお仏壇から出してきたんだ。その紙には、

おっきいじぃじ、おっきいばぁばへ
おそらでも、げんきですか。
いつもうえから見まもってくれて、
ありがとう　だいすき

という文が添えてあって、絵はお仏壇の前でお参りしている家族が描いてあるだって。

ご主人さんが

「実はね、小学二年の孫が家に来た時に、急に『紙と鉛筆ちょうだい！』と言ってきてね。何書くのかな？と思ってみていたら、急にこれを書き始めたんだよ。

書き終わったら、『これあげる！』と言って置いていったんだわ。

いやぁ、何か嬉しくなっちゃってねぇ。せっかくだから、お仏壇に入れてあるんだわ！」って、大事そうにしまってあるこの手紙を見せてくれたんだ。よほどうれしかったんだろうね、目にうっすら涙が浮かんでいたように見えたんだよね。

僕もうれしくなって、これ写真に撮っていいって聞いたら、いいよって言ってくれたんで写してきた」。

と彼もまた、うれしそうに教えてくれました。

よく見ると「なるほど、これはお仏壇だな。遺影がならんどるんだな。この遺影が、文章の大きいお祖父ちゃんと、大きいお祖母ちゃんか。描いた子から見れば、曾祖父母ということだな。お供えもしてあるな。お線香もある。チーンチーンっていうのがおリンか、ポンポンっていうのが木柾だな。お仏壇の前にパパ、ママ、あとお子さんかな？名前が書いてあるな。三人

兄弟か。並んでお参りしている様子が描いてあるんだな。家族五人で実家に帰って来た時のことをさえちゃんが描いてくれたんだ」と納得。

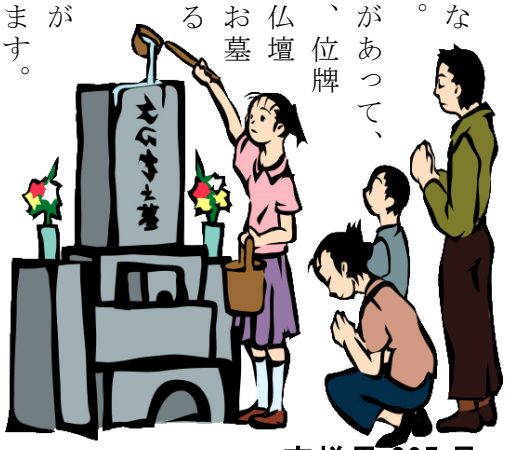
そういえば遺影の大きいお祖母ちゃんが亡くなったとき、コロナ禍で家族そろって葬式に出ることができなかったんだもんな。代表でパパだけの参列、ママもさえちゃんたち兄弟も、可愛がってくれたおっきいおばあちゃんとお別れができなかったのを残念がっていたって聞いたな。そこでLINEでお葬式中継していいかって聞かれて、初めてお葬式中継したな・・・、と思い出しました。

可愛がってもらったという想い出は、小さな心に深く刻まれ、そしてその思いがずっと続いているから、家族で実家に帰ると、いつでも自然に仏壇の前に行って手を合わせるようになったんだなと私も心を打たれました。

あの絵を描いてくれた女の子の家族は、コロナ禍で葬儀会場ではお参りできなくて、それでも最後のお別れをしたいという願いを聞き入れて、LINE中継してあげてよかったんだとつくづく思いました。

一方でLINEとか、スマホというデジタルな通信手段でのつながりもありますが、他方では仏壇とか、お墓という非常にアナログなつながりも大事なんだと考えます。遺影が飾ってある部屋に仏壇があって、位牌を前に座る遺族や友人と、位牌や遺影の故人をつなぐ窓口が仏壇なのです。遺影や位牌、またお墓の前でいろいろお話をしている人もおいでです。スマホなどの通信機器を通してデジタル回線でつながる無機的なつながりでも、心温まる伝達はできます。古来、仏壇やお墓は生きている人と故人をつなぐ立派な通信手段でした。非科学的？いいえ、心すませばお祖父ちゃんやお祖母ちゃん、ご先祖様の声が聞こえませんか？姿が見えませんか？遺影も笑っているように見えたり、怒っているように見えたりしていませんか？

あなたの心を映す鏡が仏壇やお墓なのです。いつも微笑んで見守っていただけるようにお参りをしましょう。お花を供え、お灯明をつけて、お線香を立てて、お経やお題目を唱えてお参りをすることが、先祖様のご馳走となります。それによってご先祖様は栄養をつけて、あなたたち家族を守ってくださるエネルギーとなります。



九月のお彼岸にはお墓にお塔婆を建てて、お花、ろうそく、線香を供え、お参りをしましょう。ご先祖様はお仏壇やお墓であなたを待っておいでです。

〈行合川（ゆきあいがわ）〉三十七

日蓮大聖人の頚をはねようと龍の口に連行したものの奇瑞が起こって刑もままなりません。役人は集まり、「日蓮をどういたそう。頚をはねるとて龍の口に連行し、このまま捨て置くわけにはまいらん。これは上よりの命であるから、まずは鎌倉殿に言上せずにはまいるまい」とご注進の手紙がしたためられ、宇都宮貞綱が殿中に持って行くことになりました。

一方鎌倉御殿でも、刑の執行と同じ頃、虚空に「正法の行者を失うは、国の柱を倒すがごとし」と、天のお告げが三度。驚いたのは執権の時宗公。

「うーん、正法の行者とは日蓮が日頃申せし言葉。その日蓮はいま龍の口にて断罪の時刻…。誰かおらぬか。料紙と硯をもってまいれ」

との下知に答えて、信濃の判官入道観正が墨をすって差し出しました。御自らしたためたのは大聖人の刑の執行停止の赦免状。

「南条七郎、この赦免状を急ぎ龍の口へ」

「ははあ…」

南条七郎、赦免状を押し戴いて懐中へ納め、玄関先より馬を呼び、その馬にまたがり

「やあ、やあ。それがし君命を被って龍の口へ火急のご用。乗り打ち御免。開門願う」

と駆け出し、しばらく行くと、にわか雨にて川は水かさを増し、浅瀬はないかと馬上より探っておりますと、向こうからも馬上の武士。

お互い名乗りあうと向うは鎌倉殿へ、こちらは龍の口へと向かうところ。南条七郎が用向きを尋ねると、「龍の口にて日蓮の斬首刑を執行しようとしたところ、天変地異か物の怪の集来か、執行できず、鎌倉殿にご注進に参るところ」とのこと。「こちら鎌倉御殿でも、御大将の時宗公も天のお告げを聞き、斬首刑中止の赦免状が出て持参のところ」。

不思議な巡り合わせ。『日蓮の頚斬りがたし』の注進の状と、『日蓮許す』の赦免状。互いに早打ちにて行き合ったゆえに名を残す行合川。

互いの書状を鞭の先に結びつけ投げ交わして、南条七郎は注進の状、宇都宮貞綱は赦免状を受け取り、それぞれ来た道を引き返しました。

「刑、執行中止、日蓮ご赦免、日蓮ご赦免…」

と声高に叫び刑場へ。役人たちは、ほっと一安心。

「さあ、さあ。この赦免状を日蓮に読み聞かせねばなるまい。ご貴殿にお願いいたす」

というも誰一人、読み上げるものはございません。致し方なく一人の役人が恐る恐る矢来の外から首だけ入れて、いざ読まんといたしますと、「我此土安穏　天人常充満…」と大聖人のお経の声。

「いや、いや。日蓮がまだ呪いをかけておる」

と役人が逃げ出そうとすると、斬首の催促。

「日蓮殿。鎌倉殿より刑の中止の下知状到着。依智の本間六郎重連の館に預け置きとなりました」

と告げ、大聖人は斬首の危機を免れました。